

ホタルのニュースレター

日本ホタルの会 2010 / 10 第 51 号

エッセイ ―ホタルと私⑥―

日本ホタルの会 理事 荻野 昭

ホタル飼育 40 余年

小川、水田、畑、雑木林に囲まれて点在する民家の里山環境で、乳牛を飼う酪農家に育った私は絶えず生き物に接していた為か、昆虫に特別関心があったわけではありませんでした。

1960 年社会人として西武鉄道系の会社に就職しひよんなことから、当名誉会長矢島稔氏ご夫妻のもとで働くようになり、氏の人情と昆虫の魅力に取りつかれ、氏の後を追って多摩動物公園へ、数年後正職員になり、以後停年まで昆虫飼育に携わることになりました。

当時動物園で昆虫を飼育、展示するセクションは当園が唯一で、現在日本の各地に存在する昆虫施設を誰が想像したことでしょう。インド象舎の倉庫を改修してバッタ、蝶、スズムシ等各種の昆虫を 1 年中作り出す飼育が始まりました。ホタルは 1962 年、水盤にゲンジボタル幼虫を展示することからでした。

多摩動物公園では昆虫園の将来計画があって、ホタル飼育場建設もその一

つでした。水族室の一部を利用したり水槽を並べて矢島氏指導のもと飼育の試行錯誤が続けられました。

1966 年、多摩川から都心へ注ぐ玉川上水の支流、千川上水（武蔵野市）にヘイケボタルが大発生しました。しかしその地域は暗渠化が決定しており、「玉川上水を守る会」からそのホタルを守るための要請があり、成虫を捕獲（355 匹）産卵させ孵化した幼虫を安全な水路へ戻しました。新聞各紙の報道は大きな反響を呼びました。この時代、自然の大切さや保護運動が各地で報ぜられ、ホタルがいるだけでニュースになったのです。

1968 年、東京都民の水甕「奥多摩湖」の所在地奥多摩町役場から、絶えて久しいホタルの復活はできないかとの相談がありました。そこで現地の環境を調べ、回復の可能性がある 2 地域にゲンジボタルの幼虫を放ちました。

1969 年 7 月、昆虫園本館（現トンボ館の前身）のオープン準備で多忙な折、奥多摩町役場からホタルが飛び出

したとの朗報です。採卵のための成虫を捕獲し、夜行性動物の片隅で発光するホタルを展示しました。濃緑に覆われた清流上を飛び回る光に感激し、環境良好な場所さえ確保できればその復活も夢でないと実証されたのです。室内飼育の限界と自然の威力を改めて痛感した体験から循環式の屋外飼育場が、1973年に完成しました。その概要と飼育経過はインセクトariumを参照いただきたい。

ホタル飼育場の完成後自然回復を願う個人・自治体からの相談や指導要請が多くなり、携わった同様の飼育場は、町田市、足立区、世田谷区、府中市、埼玉県飯能市などに作られました。

八王子の小学校からも相談を受け、1980年に校庭の片隅にホタルを飛ばすことに成功しました。その先生は当会理事、小俣軍平氏との出会いでした。

1988年、大温室に通年蝶の飛び交う“昆虫生態園”が完成しました。その一角には夜行性昆虫コーナーがあり、ホタルもその一翼を担い、ゲンジボタルの発生期以外はヘイケボタルで対応すべくその方法を以前からテストして、暖房するだけで年間を通して羽化が可能になっていました。それでも冬期の不安定時には、幼虫が発光するクロマドボタル、秋から冬に成虫になるアキマドボタル・オオシママドボタルの陸

生種の飼育も試みました。

2005年、鳴く虫類・カブトムシ・ホタルなど昆虫の飼育一筋の生活にピリオド（退職）を打った私は、生まれ育った地と近隣自治体から減少してしまったホタルの相談に対応したり、自宅で細やかに飼育をしたりとホタルの復活に取組み、2010年には曼殊沙華の群生地として著名になった市内の中着田（きんちゃくだ）に素彫りの水路を設け（写真1）サポーターズ・クラブの一員としてホタルも生息できる環境作りに追われています。

「ホタルの研究」の著者、南喜市郎氏は、1951年からホタルの室内飼育に着手され、7年後の1958年に初めて、ゲンジ・ヘイケボタルの羽化に成功されたとのこと。当時は陶器製水盤を使われていたが、その後プランター・発泡スチロール等化学系容器を水槽使用に工夫して飼育研究を行う愛好・研究家が多く輩出し、野外に水路（人工の川）を設ける方法（循環・放流式）へと移行し、その成果は各地の



写真1 素彫りの水路を設けた巾着田

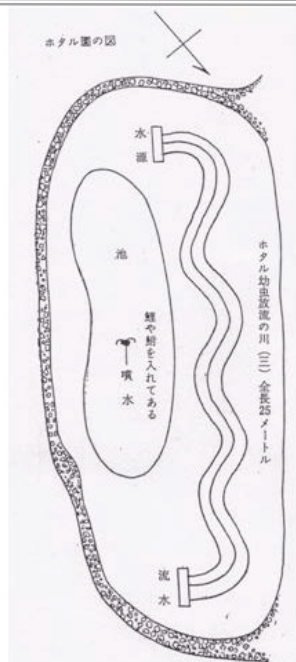


図1 造成した屋外水路

しました。(国立市図書館調べ)。

多摩動物公園の所在地日野市に隣接する国立町(現国立市)の屎尿処理場「清化園」で1959年にホタル園が生まれていたのです。当時の町長(田島守保氏)は、1957年に神田左京著「ホタル」を偶然入手し、養殖を思い立つ。そんな折大分県の高校教師、秦野多喜生氏がその養殖に成功したとの新聞記事に接し、九州へ再三足を運び、1960年の春、図1のような長さ25m、幅30cm、水深20cmの人工川を3本作り、翌年九州からゲンジボタルの卵1000粒を入手し、1962年にその羽化に成功したとのことです。尚、多摩動物公園のオープンは、1958年(昭和33年)の5月です。

昆虫の飼育に携わってから、新聞記事のスクラップも心掛けてきました。ホタルに関する記事を整理中、自身の

思いがけないメモが見つかりました。すばらしい眺め“ゲンジボタル”
高麗川橋上流にかけて
ほんのり明るい所
川の深みに体半分水に浸りながら
採った蜉
科学的に生態的飼育観察しなければ
いけないと決心する。
いや昆虫を仕事としてこれ以上の喜びはないであろう。
このような場所や環境を作り
皆さんに見ていただく。
それにはその餌をたくさん飼育
ほたるの飼育も十分な対策をもって
当たらなければならない。

(1964年6月4日)。

埼玉県の家近くでのホタルとの邂逅(かいこう)を記したもので、ホタルが減少しつつある状況も垣間見られ、その体験は覚えているものの、将来を見すえた決意らしき駄文には、自身も驚いております。実際にそれに近い人生を送ることになったのだから。

・・・昆虫の飼育を始めて46年目、
22歳の青年が今68歳になりました。

参考文献

荻野昭(1997)多摩動物公園のホタル飼育—24年目の苦闘—, インセクタリウム, vol.34(5).

(おぎの あきら)

多摩動物公園にて矢島稔氏と共に昆虫園展示に長年関わる。
著書に、学習研究社「カブトムシ・昆虫飼育日記」、偕成社「ホタル」(共著)。
現在、日本鳴く虫保存会相談役。

連載

(最終回)

ホタルの名前について (6)

日本ホタルの会副会長 鈴木 浩文

はじめに

ホタルの名前の問題については、これまで「ホタルのニュースレター」No. 43、44、45、47、48に掲載してきました。今回は、これまでのまとめになります。

和名としてのホタルの名前には、学術名（学名）のように国際的な命名規約による表記上の取り決めがありませんので、1つの種類にいくつもの名前が使われており、混乱しているのが現状です。川島らの論文（1）は、日本産ホタル類の分類学的な問題点を整理すると共に、和名についても、これまでの混乱を解消するために、つくつかの新たな名前を宛がっています。その説明については、以前のニュースレターを参照して下さい。

ここでは、和名についての主な問題点を指摘し、これまで（1980年代以降）使われてきた和名（文献2～6）に対して、川島らの論文（1）では、どのように扱っているのかをまとめました。

主な問題点

問題点1：ホタルとホタルモドキおよびベニボタルの問題

ホタルであるにもかかわらず、カタアカホタルモドキやスジグロベニボタルなど、～ホタルモドキ、～ベニボタルという名前が付いている種類があります。これは、当初ホタルモドキやベニボタルの仲間として記載されたものが、その後の研究でホタルの仲間に移されましたが、和名はそのまま使われているためです。ホタルであるのに、ホタルではない仲間の名称が付いているのは混乱を招きますので、川島らの文献（1）では、～ボタルの名称を採用しています。

問題点2：エダヒゲボタルとクシヒゲボタルおよびフサヒゲボタルの問題

Stenocladius という属には、クシヒゲボタル属とフサヒゲボタル属の2つの名称が使われています。これは、触角の特徴をクシヒゲと表現するのかフサヒゲと表現するかの違いですが、同様に *Cyphonocerus* という属にも、エダヒゲボタル属とク

シヒゲボタル属の2つが使われています。このように、1つの属に2つの名称が使われ、さらにその内の1つの名称が2つの属にまたがって使われており、混乱しています。川島らの論文(1)では、*Cyphonocerus* にクシヒゲボタル属を宛がい、*Stenocladius* にはヒゲボタル属という新しい名称を宛がっています。

問題点3：マドボタルとオバボタルの問題

ハラアカオバボタル(別名サキシママドボタル)はマドボタル属に属していますが、オバボタルの名称で呼ばれています。やはり、これは混乱します。マドボタル属ですので、サキシママドボタルという名称の方がふさわしいのですが、先島諸島の中の宮古群島には分布していないので、この名前も適切ではないように思えます。そこで、ハラアカマドボタルという新しい名前を宛がっています。

日本産ホタル類の和名リスト

以下に川島らの論文(1)によって推奨されている和名のリストを挙げます。和名の後に米印(*)が付いているものは、新たに付けられた名前で、括弧の中の名前はこれまでの文献(2~5)で使われているものです。また、米印が2つ付いているものは、川島らの論文(1)以降に新たに記載されてものです(文献6)。なお、亜種は含まれていません。

ホタル科

クシヒゲボタル亜科(エダヒゲボタル亜科)

クシヒゲボタル属(エダヒゲボタル属)

1. ウスグロボタル
2. ヘリアカボタル(ヘリアカクシヒゲボタル)
3. オキナワクシヒゲボタル
4. ムネクリイロボタル(ヒメホタルモドキ)
5. クロクシヒゲボタル
6. ヤエヤマクシヒゲボタル(ムネグロボタル)

ミナミボタル亜科(ホタルモドキ亜科)

ミナミボタル属(ホタルモドキ属)

7. イヘヤアカミナミボタル**
8. アクセキミナミボタル
9. カタモンミナミボタル(カタアカホタルモドキ)

- 10. アマミアカミナミボタル* (ハネアカホタルモドキ、アカミナミボタル)
- 11. ヨナグニミナミボタル
- 12. オキナワアカミナミボタル (ウスアカホタルモドキ)
- 13. トクノシマミナミボタル (トクノシマホタルモドキ)
- 14. クメジマミナミボタル**
- 15. ツماغロミナミボタル**
- 16. オオバヤシミナミボタル (アカホタルモドキ)
- 17. オキナワクロミナミボタル (オキナワクロホタルモドキ)
- 18. ムネアカミナミボタル**
- 19. アマミクロミナミボタル (アマミミナミボタル、アマミクロホタルモドキ、アマミオオホタルモドキ、オオミナミボタル)
- 20. ナンザンミナミボタル**
- 21. クロミナミボタル (クロホタルモドキ)

ヒゲボタル属 (クシヒゲボタル属、フサヒゲボタル属)

- 22. タテオビヒゲボタル* (タテオビクシヒゲボタル、タテオビフサヒゲボタル)
- 23. シブイロヒゲボタル*
- 24. キベリヒゲボタル* (キベリクシヒゲボタル、キベリフサヒゲボタル、キイロクシヒゲボタル、キイロフサヒゲボタル)
- 25. アマミヒゲボタル*

ホタル亜科

ホタル属

- 26. ゲンジボタル
- 27. ヤエヤマヒメボタル (ヤエヤマボタル)
- 28. クロイワボタル
- 29. ヘイケボタル
- 30. クメジマボタル
- 31. ヒメボタル
- 32. ツシマヒメボタル (パパリボタル)

スジボタル属

- 33. キイロスジボタル
- 34. オキナワスジボタル

マドボタル亜科 (オバボタル亜科)

マドボタル属

- 35. ハラアカマドボタル* (ハラアカオバボタル、サキシママドボタル)
- 36. ヤエヤママドボタル* (オオシママドボタル)
- 37. オオマドボタル
- 38. クロマドボタル
- 39. イリオモテマドボタル
- 40. オキナワマドボタル (オキナワオバボタル)
- 41. ミヤコマドボタル
- 42. アマミマドボタル
- 43. アキマドボタル

オバボタル属

- 44. オオオバボタル
- 45. オバボタル
- 46. ナツミオバボタル (ヤエヤマヒメオバボタル)
- 47. コクロオバボタル

スジグロボタル属 (スジグロベニボタル属)

- 48. スジグロボタル (スジグロベニボタル)
- 49. シコクスジグロボタル (ヒメスジグロベニボタル)

オオメボタル科

オオメボタル属

- 50. イリオモテボタル

おわりに

川島らの論文(1)以降、新たな知見も加わっています。ヨナグニミナモボタルは、文献1と6で同じ和名が使われていますが、学名の方が変更されていますので、以前のニュースレターを参照して下さい。また、いくつかの名前がある場合、どちらの名前を採用・推奨するかというのは、単に合理的な理由によるだけではなく、学派間や共著者間の妥協によるところもあります。これまで使い馴染んできた名前に対して、新たな名前を付けることは、更なる混乱を招いてしまうことも確かです。新種、新名の提唱は慎重でなければなりません。

文 献

1. Kawashima, Suzuki and Sato (2003) A check-list of Japanese fireflies (Coleoptera, Lampyridae and Rhagophthalmidae). Japanese Journal of Systematic Entomology 9 (2): 241-261.
2. 中根猛彦 (1981) 日本にいるホタルの種類. 中根猛彦・大場信義 著. ホタルの観察と飼育: 81-113, ニューサイエンス社
3. 佐藤正孝 (1985) ホタル科. 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 編, 原色日本甲虫図鑑 (III): 121-124, pl 20, 保育社
4. 大場信義 (1986) ホタルのコミュニケーション. 東海大学出版会
5. 佐藤正孝 (1989) ホタル科. 平嶋義宏 監修, 日本産昆虫目録: 315-353, 九州大学農学部.
6. Kawashima, Satou and Sato (2005) The lampyrid genus *Drilaster* (Coleoptera, Lampyridae, Ototretinae) of the Ryukyu archipelago, Southwest Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology 11 (2): 225-262.

(すずき ひろぶみ)

2010 年度 ホタル観察会報告



写真1 明るいうちに行われた生息場所観察

日本ホタルの会会員 後藤 雅子

私が今回、静岡富士宮での観察会に参加したのは、日本ホタルの会の役員である兄の誘いがあったのでした。私自身はホタルに関して知識のない素人なので、研究者の集まる会ならば、沢山のホタルが見られるのだろうという軽い気持ちで参加をしましたが、実

際には、当日雨が降り気温も低くなったためか、ゲンジボタルも20〜30匹ほどで期待より飛ばず、ヒメボタルにいたっては一匹も見ることができませんでした。それでも私がガッカリしなかったのは、これが「鑑賞会」ではなく「観察会」であったからだと思います。

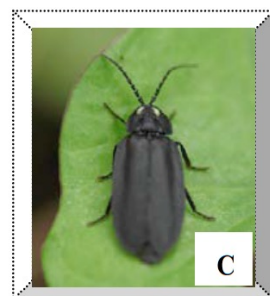
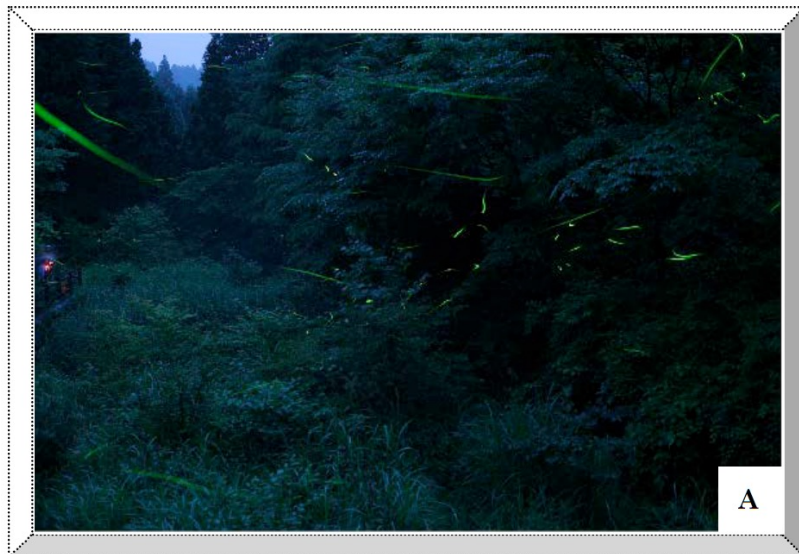
ゲンジボタルを観察するキャンプ場で、明るい内に生息場所の確認へ行った時、キャンプ場の管理人も五年ぶりに見たというクロマドボタルをいの一匹に見つけ、その後つぎつぎとオバホタル、オオオバボタル、ムネクリイロボタルと様々なホタルの生息を確認できたことに驚きました。このうちゲンジボタルしかあの光を発しないということが、私には意外でしたが、これだけの種類を一度に見ることができたのは研究者の観察眼があったのだと思います。

その夜、ゲンジボタルの観察後、ヒメボタルの観察スポットへ行きました。その頃には雨も本降りになり、上着がないと寒いくらいでした。足元の悪い山道を登っていき、たどりついたスポットで手元の明かりの一切を消すと、辺りは体をのみこまれるような暗闇に包まれます。みな一様に沈黙し、周囲に目をこらしますが、ヒメボタルはこの日飛びませんでした。幾分、後ろ髪を引かれつつ宿へ戻る途中、「貴重な暗闇体験だった」という兄の一言がとても印象的でした。

自然の中を歩きながら、参加した方々の豊富な知識を聞くのは興味深く、とても楽しいものでした。そして、雨が降ったり、たとえ蛍が光らなくても、単に蛍を見て綺麗だなと満足していた時より自然を体感できた貴重な体験だったと思います。

(ごとう まさこ)

日本ホタルの会観察会—静岡県富士宮—



7月3日に行われた観察会では、多数のゲンジボタル明滅飛翔（写真A）の他、オバボタル成虫（写真B）やクロマドボタル成虫（写真C）など多くの陸生ホタルも観察されました。

撮影：古河義仁 (<http://www.tokyo-hotaru.com>)

INFORMATION

事務局からの
お知らせ

イベント案内（参加費無料）

《第18回 日本ホタルの会シンポジウム》

—里山の復元についての意味を考える—

日 時	2010年10月30日（土）	13:00-17:00
会 場	工学院大学 新宿キャンパス	高層棟11階A-1111教室
スライドショー	「写真で見る里山とホタルの風景」	古河義仁
講演	「ホタルとの関わりを再度考える」	鈴木浩文
事例報告	「工学院大学 ホタル研究会」	釜谷美則

ホタルのニュースレター（第51号）

2010年10月25日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒197-0011 東京都福生市福生487（日本ホタルの会事務局）

TEL&FAX：042-530-2111

e-mail：mail@nihon-hotaru.com URL：http://www.nihon-hotaru.com

印刷 文明堂印刷株式会社 〒239-0821 神奈川県横浜須賀町東浦賀1-3-12

TEL：046-841-0074 FAX：046-841-0071